



Japan
Food
Research
Laboratories

試験報告書

第 206051454-002 号
2006年(平成18年)07月21日

依頼者 ココロ株式会社

検体 ココロチャーガ

表題 マウスを用いた急性経口毒性試験

2006年(平成18年)05月19日当センターに提出された
上記検体について試験した結果は次のとおりです。

代表者

日本食品分析センター

東京本部 〒151-0052 東京都渋谷区元代々木町52番1号
大阪支所 〒564-0051 大阪府吹田市豊津町3番1号
名古屋支所 〒460-0011 名古屋市中区大須4丁目5番13号
九州支所 〒812-0034 福岡市博多区下呉服町1番12号
多摩研究所 〒206-0025 東京都多摩市永山6丁目11番10号
千歳研究所 〒066-0052 北海道千歳市文京2丁目3番

マウスを用いた急性経口毒性試験

要 約

ココロチャーガを検体として、マウスを用いた急性経口毒性試験(限度試験)を行った。

試験群には5,000 mg/kgの用量の検体を、対照群には溶媒対照として0.5 w/v%ヒドロキシプロピルメチルセルロース溶液を雌雄マウスに経口投与し、14日間観察を行った。その結果、観察期間中に異常及び死亡例は認められなかった。このことから、検体のマウスにおける経口投与によるLD50値は、雌雄ともに5,000 mg/kg以上であるものと考えられた。

なお、試験群には2,500 mg/kgの用量の検体を、対照群には20 mL/kgの注射用水を1日に2回、2時間の間隔を空けて投与した。

依 頼 者

ココロ株式会社

検 体

ココロチャーガ

試験実施期間

平成18年05月25日～平成18年07月21日

試験実施場所

財団法人 日本食品分析センター 多摩研究所
東京都多摩市永山6丁目11番10号

試験責任者

財団法人 日本食品分析センター 多摩研究所
安全性試験部 安全性試験課
嶋崎 智子

試験実施者

永井 武 ， 神田 純 ， 川本 康晴 ， 小澤 美来

1 試験目的

検体について、マウスにおける急性経口毒性を調べる。

2 検 体

ココロチャーガ

性状：茶色の粉末

3 試験液の調製

検体に0.5 w/v%ヒドロキシプロピルメチルセルロース溶液を加え、ホモジナイザー [KINEMATICA] を用いて均一にし、125 ng/mlの試験液を調製した。

なお、試験可能な最高濃度は125 ng/mlであった。

4 試験動物

5週齢の[CX系]雄マウスを日本エスエルシー株式会社から購入し、約1週間の予備飼育を行って一般状態に異常のないことを確認した後、試験に使用した。試験動物はポリカーボネート製ケージに各5匹収容し、室温23℃±2℃、照明時間12時間/日に設定した飼育室において飼育した。飼料[マウス、ラット用固型飼料；ラボMRストック、日本農産工業株式会社]及び飲料水(水道水)は自由に摂取させた。

5 試験方法

検体投与用量として5,000 ng/kgを投与する試験群及び溶媒対照として0.5 w/v%ヒドロキシプロピルメチルセルロース溶液を投与する対照群を設定し、各群につき雌雄それぞれ5匹を用いた。

投与前に約4時間試験動物を絶食させた。体重を測定した後、試験群には試験液、対照群には0.5 w/v%ヒドロキシプロピルメチルセルロース溶液をそれぞれ10 mg/kgの投与容量で胃ゾンデを用いて強制経口投与した。

なお、試験群及び対照群ともに、1回の投与用量は20 mL/kgとし、1日に2回、2時間の間隔を空けて投与した。

観察期間は14日間とし、投与日は頻回、翌日から1日1回の観察を行った。投与後7及び14日に体重を測定し、t-検定により有意水準5%で群間の比較を行った。観察期間終了時に動物すべてを剖検した。

6 試験結果

1) 死亡例

雌雄ともにいずれの投与群においても、観察期間中に死亡例は認められなかった。

2) 一般状態

雌雄ともにいずれの投与群においても、観察期間中に異常は見られなかった。

7 考 察

検体について、マウスを用いた急性経口毒性試験(限度試験)を実施した。

検体を5,000 ng/kgの用量で経口投与した結果、観察期間中に異常及び死亡例は認められなかった。したがって、検体のマウスにおける経口投与によるLD50値は、雌雄ともに5,000 ng/kg以上であるものと考えられた。

8 参考文献

- ・ OECD Guidelines for the Testing of Chemicals 420(2001).